元プロテニスプレイヤー

杉山 愛さん

今回お話を伺った杉山愛さんは元世界的プロテニスプレイヤーで，現役時代の最高位の世界ランキングはシングルス８位，ダブルス１位。引退後もテレビのコメンテイターやジュニアテニスプレイヤーの育成などで幅広い活躍をされている。

杉山さんは大変気さくな方で，インタビューでは，現役時代の舞台裏から弁護士のイメージにいたるまで，幅広く語っていただいた。

（聞き手・構成：西岡 毅，高橋辰三）

── まず，テニスを始めたきっかけから教えて下さい。

4歳の頃に，スポーツ好きの両親の勧めもあり，家族一緒に楽しむためということで始めました。小さい頃から体を動かすのが好きで，器械体操，フィギュアスケート，クラシックバレエやピアノと色々やっていました。テニスもその中の一つでした。

7歳のときに，たまたま近所に本格的なテニスアカデミーができたんです。そこの選手コースへ合格して，週4，5回通うようになってからは，テニス一筋になりました。

── 色々なスポーツを経験されていたのですね。個人スポーツが多いようですが，チームスポーツに興味はありませんでしたか。

たしかに振り返ってみると，個人競技ばかりで，チームスポーツはやったことないですね。性格が個人スポーツ向きだったのかもしれませんね（笑）。

── ご両親の勧めということですが，ご両親から無理矢理アカデミーに通わされていたというような面もあったのでしょうか。

そんなことは全くありませんでした。テニスが大好きでしたから，アカデミーには遊びに行っているような感覚です。母からは，ちゃんとほかのことをやらないと，テニススクールへ行かせないわよ，と注意されるくらいでした（笑）。

── プロへの転向をお決めになったころについてお聞かせ下さい。

テニスアカデミーへ通い始めたときからプロへの憧れはありましたが，プロでやっていけるという自信を持ったのは，15歳のときでした。15歳の時に，18歳以下が対象とされている世界ジュニアランキングで1位になったんです。これは日本人で初めてのことでした。

その後，高校1年生のときに，全日本室内テニス選手権という日本の大きな大会にアマチュアとして参加したのですが，そこでプロを破って優勝したんです。そのときにプロ転向を決意して，結局，高校2年生のときにプロになりました。

── アマチュアからプロになられて，変わったことはありましたか。

アマチュアのときは完全燃焼さえできれば満足できました。でも，プロはそれだけでは足りません。もちろん完全燃焼は重要ですけど，観客の皆さんに，感動，元気，勇気を与える，楽しんでもらうということが大切です。プロになってからは，そういう意識でプレイしていました。

── プロツアーでは海外転戦されるわけですが，移動や食事等，色々と大変だったのではないでしょうか。

移動については，移動自体を楽しもうという気持ちでやっていましたから大丈夫でした。

食事については，ツアーを始めた頃は小さな街を回ることが多かったですから，どこの街にでもある中華料理でしのいでいました（笑）。中華料理で，野菜，肉など栄養のバランスをうまく取っていました。ランキングが上がって，大きな街を回るようになってからは，和食やイタリアン，現地の料理など色々な料理を楽しめるようになりました。

とにかく，何でも楽しむということが一番大事だと思うんです。疲れたとか，ホームシックになってしまったという気持ちでいてはツアーはやっていけません。アウェーをホームに感じられるような環境づくりを心がけて試合に臨むことが大切です。

── 言葉の問題はいかがでしたか。

幼い頃から英語には憧れがあり，小さいころから英語をしゃべれるんだという気持ちが先走るくらいでしたから，それほど苦手意識はありませんでした。元々14歳のころから海外遠征もこなしていましたし，何より積極的な性格でしたから，外国の選手とどんどん会話する機会を持つように心がけていました。

ただ，きちんとした英語を喋れるわけではなかったので，試合前の英語のインタビューが上手くいくかというのが一つの負担になっていたんです。それで，そういった負担を無くして万全のコンディションで試合に臨みたいと思って，一念発起して英語をしっかり勉強しました。

その結果，選手とのコミュニケーションが増えて，ツアー生活を楽しむことができました。ダブルスのパートナーにも恵まれたので，たとえシングルスが不調でも精神状態を保ってダブルスで挽回することもできました。これらは全て言葉のコミュニケーションあってこそだと思います。

── プロ選手として活動されるにあたり，ご家族の応援はいかがでしたか。

私のテニス人生は，家族の全面的な協力なくしてはありえません。

特に母は，私が幼い頃から，テニスアカデミーへの送迎，お弁当の準備など本当に尽力してくれました。母は，私が自分を信じられないようなときでも，私以上に私を信じてくれました。家族だからこその信頼ですね。本当に感謝しています。

── テニスと言えば，英・仏・米・豪で行われるグランドスラム大会が特に有名ですが，グランドスラム大会というのはどのような存在でしょうか。

やはりとても特別なものです。スペシャル感が違いますね。グランドスラムのために日々のテニスを頑張っていると言えるかもしれません。

個人的には，その中でもウインブルドンが最高の舞台でした。もちろん，4つの大会それぞれに良さはありますけど。

── そのような大きな大会では，プレッシャーへの対処も大変だったのではないでしょうか。

若いときは，色々と空回りをしていたようなところもありましたけど，ある程度経験を重ねてからは，緊張したときのベストの出し方，コンディションの作り方等の引き出しも増えましたので（笑），落ち着いて対処できるようになりました。

とにかく，自分のベストを尽くすよう準備する，これに尽きると思います。相手の研究も大事ですが，まず，自分のテニスをしっかりやる。自分のやるべきことができてないで負けることが一番悔しかったです。相手が自分以上のパフォーマンスをすれば負けるときもありますけど，それは次の課題として対処できますから。

── テニスコートには芝生，クレー，ハードと色々な種類がありますが，異なるテニスコートへの対応も求められますね。

コートの種類が違う場合にはもちろん対応も変わってきますが，例えば，同じハードコートでも，球足の速さ，バウンドの高さ，ボールの飛びやすさが違った

りします。ボールもメーカーによって弾み方に違いがありますし。

良い結果を出すには，そのような違いにアジャストしていくことが必要です。ラケットの選択，ガットのテンションの調整などで対応していくわけです。

私の場合は，1つの大会で6本くらいのラケットを使用していました。ガット張りも，気に入ったスタッフにお願いしたりして。同じ数値で頼んでも，張り上がりが変わってきますから。

── 対戦したくない選手，苦手な選手というのはいらっしゃいましたか。

私の場合は，セリーナ，ビーナスのウィリアムズ姉妹ですね。苦手意識というか，あの二人には勝ったことがないんです。実力差もあったと思いますけど，身長も大きいですから，とにかく迫力に圧倒されてしまうというところがありました。

── ボールも速そうですしね。

必ずしもそういう訳でもないんです（笑）。ただ，プレイ中の声も大きくて，それほど速いボールでもないのに，大声で打たれると感覚がズレてしまうということはありました。あ，意外に伸びてこない，とか（笑）。

── 試合中の対戦相手の声というのは気になるのですね。

中にはうるさいと思うような選手もいます（笑）。でも，あれはわざと出してる訳ではないですから，試合中は出来る限り自分にフォーカスするようにしていました。

逆に，私自身も，乗っているときは自然に声が出たりしますし，呼吸を意識するためにわざと声を出すこともありました。

── 最も印象に残っている大会というとどの大会になりますか。

生涯で約1700試合もプレイしてますので難しいですけど（笑），あえて選ぶとすれば，2003年のアメリカのステート・ファーム・クラシックでしょうか。

その大会では，まずシングルスで1日4試合，合計6時間18分もプレイして，5年ぶりのツアー優勝を果たすことができました。シングルスの準決勝はマッチポイントを3回もしのいでからの大逆転でしたし，決勝の相手は，ダブルスのパートナーのキム・クライシュテルス選手だったんです。キム・クライシュテルス選手に1stセットをとられてからの逆転劇。しかも，その大会のダブルスでも，彼女と組んで優勝できました。ドラマチックでしょう（笑）。

少し前にはテニスを辞めようと思ったこともあるくらいのどん底を通過した後の優勝でした。この優勝で，ランキングも20以内に返り咲き，10位以内を狙えると確信できた大会でした。

── まるで映画や小説のようなシーンですね（笑）。ダブルスパートナーとシングルスで対戦するというのはやりにくいものでしょうか。シングルスでの戦いに備えて，手のうちはあかさないというような面もあるのでしょうか。

それはないですね（笑）。パートナーの癖もコンディションも気持ちも全て分かった上で対戦します。結局は，自分のベストを尽くすということです。

── 引退を決意されたときのお気持ちは？

もうすっかりやり尽くした，肉体的にも気持ち的にも燃え尽きたという思いで引退を決意しました。ですから，引退後はとても晴れ晴れした気持ちでした。

── 実際に引退をされるより前に引退を考えたことはありましたか。

はい，一度だけ，どん底を味わった時に辞めたいと思ったことがありました。その時は，自分のテニスを見失い，不完全燃焼でやりきっていないと思っていましたし，母や周りの仲間からも不完全燃焼じゃないかと言われていました。実はその時に，母が「私のテニスが見える」と言ってくれていたので，母にコーチを頼むことにしたんです。

── 募金，寄付などの慈善活動に積極的に取り組まれていますが，そのような活動をするようになったきっかけは何かあるのですか。

アウェーをホームに感じられるような環境づくりを心がけて試合に臨む。海外転戦では，移動でも食事でも，とにかく，何でも楽しむことが一番大事だと思うんです。

杉山　愛

プロテニス界では社会貢献活動が盛んに行われています。例えば，貧しい国で学校や病院の建設をする選手がいます。海外のトッププレイヤーたちは，古くからチャリティーで寄付をするということを当たり前のように行っていましたので，現役時代，自分自身も何ができるかを自然と考えるようになりました。その結果，私は，乳がんをなくすための「ほほえみ基金」への寄付やジュニア育成基金を始めました。こういった活動は，プレイにあたっても励みになりましたね。

最近では，東日本大震災に触発されて，世界のテニスプレイヤー達が立ち上がってチャリティーイベントを行っています。今回の震災に限らず，ハイチ，スマトラの震災の際もオークションやチャリティーマッチが行われていました。

── ジュニアの育成の活動に取り組まれていますが，後進育成についての想いを教えていただけますか。

私自身，ジュニア時代から様々な先輩たちに支えられながらやってきました。「今の自分があるのはテニスからいろいろなことを与えてもらったから。」，「杉山があるのはテニスのおかげ。」と考えて，テニス界に恩返しをしたいと思ったのがきっかけです。現在「ロード・トゥ・グランドスラム」というプロジェクトを立ち上げ，年に数回，ミニキャンプを開いています。人間的な総合力を鍛えないことには，世界に通用する選手にはなれないと考えていますので，自分が培ったテニスの技術的ノウハウに加え，様々なエッセンスを日本のトップのジュニアたちに伝えたいと考えています。

自分がやってきたテニスを子供たちに伝えるのは幸せなことで，ジュニアの子どもたちと夢を追うことはとても楽しいです。

── プロテニスプレーヤー，プロのスポーツ選手として法律問題にかかわることはありましたか。

国際的には，スポーツ界も法の整備が進んでいますが，プロテニスの世界は非常にグローバルですから，エージェントの制度が古くから整っていました。そういう事情もあって，他競技に比べてトラブルが少なく，プレイヤーがイザコザに巻き込まれたという話はあまり聞いたことがないです。

── 最後に，日本の弁護士，弁護士会についてのイメージや意見などがありましたら教えていただけますか。

イメージは，もう，バリバリできる，かっこいいっていうイメージですね（笑）。

弁護士が物事を整理してくれないと社会が回っていかないと思いますので，弁護士という存在は重要な役割を果たしてくれていると思います。私たちプレイヤーも，エージェントの方々が活躍してくれてはじめてプレイに専念できますので，とても助かっていました。世界を舞台に活躍をしていくにあたっては，このような役割の方の支えが非常に重要だと感じています。

── 本日は，ありがとうございました。これからのご活躍も楽しみにしております。

ありがとうございました。

プロフィール　すぎやま・あい

1975年 神奈川県生まれ。4歳でテニスを始め，15歳で日本人初の世界ジュニアランキング1位，17歳でプロ転向。グランドスラムでは女子ダブルスで3度の優勝，混合ダブルスでも優勝を経験し，シングルス連続出場62回の世界記録を樹立。オリンピックに4回連続出場。2009年現役引退。現在は，情報番組のコメンテイターなど多方面で活躍。杉山愛ジュニア育成基金を立ち上げ，16歳以下の女子選手をサポートする『Road to Grand Slam』プロジェクトを始動。